

令和5年度 学校評価総括評価表

徳島県立穴吹高等学校

重点課題	重点目標	評価指標	活動計画	評価指標による達成度 ※()内は昨年度	総合評価	学校関係者評価	次年度への課題・改善策
1 確 か な 学 力 の 育 成	1-1 自らの将来を具体的に思い描き、主体的に学習することを通して、基礎学力の伸長と進路実現を図る。	1① 基礎学力養成のため校内で漢字テストおよび英単語テストを実施し、年間平均85点以上の優秀者の割合を、全学年、漢字テスト、英単語テストともに30%以上を目指す。	1① 実施日に向けて国語科・英語科を中心に事前対策を行い、各学年・クラスでも学習を奨励し、校内表彰に加えて学年表彰を設けることで漢字および英単語の習得を督励する。	年間平均85点以上の優秀者の割合 漢字テスト 〔1学年〕 27.3%(34.7%) 〔2学年〕 31.9%(50.0%) 〔3学年〕 53.6%(43.4%) 英単語テスト 〔1学年〕 45.5%(21.7%) 〔2学年〕 19.2%(34.6%) 〔3学年〕 46.4%(42.2%)	B	昨年度の割合よりも数値が極端に下がっているものについては、原因を分析した上で適切な改善策を講じ、次年度の取り組みにつなげていくことを期待する。 学習時間が前年度に比べどの学年も減少傾向にある。	週末課題や日々の宿題などで、長期の時間をかけて学習内容を習得できるように働きかける。小テストなどを継続的に行い、生徒自身が自分の学習状況を自覚し、つまずきや出来ていない箇所を認識しできるようにする。上位層だけでなく、下位層の生徒の指導をきめ細やかに行う。
		1② 1年生で国語・数学・英語の基礎教科に関して学び直しを行い、認定テストの最上級の合格率60%以上を目指す。	1② 授業および課外学習での学習時間を確保するとともに、定期考査の出題範囲に盛り込むことにより学習意欲の高揚と持続を図る。	1年生認定テスト最上級合格率 国 語 85.6% (93.9%) 数 学 79.0% (87.8%) 英 語 64.4% (63.3%)	A	が、これはコロナが落ち着いてきたことが要因の一つではないかと推察する。今までしたくてもできなかった	義務教育内容の学び直しや定着に向けて、授業の中で振り返る時間を設けたり、高校での学習内容と関連させたりして指導する。
		1③ 学力の定着を図るため家庭学習を促し、特に定期考査期間中、各学年において一人あたりの1日平均学習時間2時間以上を目指す。	1③ 考査期間を含む1週間の家庭学習時間調査を実施し、生活スタイルの見直しや適切な学習内容について担任が助言する。	一人あたりの1日平均学習時間 〔1学年〕 1.9時間(2.1時間) 〔2学年〕 1.7時間(2.0時間) 〔3学年〕 2.0時間(2.8時間)	B	様々な経験や交流ができるようになっていて、机に向かう学習だけではなく、生徒の個性や学習意欲を伸ばす機会の創出も重要と考える。	家庭学習時間調査を定期考査ごと に実施し、学習状況を確認するとともに、個別に声かけ等を行い家庭学習習慣の定着につなげる。
		1④ 生徒対象の進路ガイダンス、進路模擬授業及び保護者対象の進路説明会等の行事を年間5回以上実施する。	1④ 各行事の内容を精選し、生徒の興味・関心・適性等に沿ったものにする。また、保護者に積極的な参加、参観を勧めるために進路説明会の内容を工夫する。	生徒対象進路ガイダンス5回(4/11、5/14、7/3 9/7、11/18)進路模擬授業及び保護者対象進路説明会等3回 (5/14、11/18、3/18)実施	A	相互授業参観等による授業改善が進んだ成果が「教師が工夫してわかりやすく教えているか」の問いに対する「そう思う」の割合の増加につながっていると考察する。スモールステップを大切にした指導の充実とキャリア育成に向けた3年間を見据えた指導を期待している。	より主体的な進路決定ができるように、情報量を増やしたり体験的な学びの場を設定したりすることで、保護者を含め能動的なキャリア学習を重ねさせる。
	1-2 主体的・積極的に学習に取り組む姿勢を育成できるよう授業の工夫をする。	2① 他の教員の授業を1・2学期、各2名以上の授業を見学する。授業見学率100%を目指す。	2① 1・2学期に各1か月すべての授業を公開し、他の教員の授業を参観し、点検することにより、自らの授業力の向上やスキルアップを図る。また、授業者も参観シートで指摘を受けることにより授業実践力の向上を図る。	教員2名以上の授業見学率 〔1学期〕 100% (100%) 〔2学期〕 100% (100%) 年間全体 100% (100%)	A		授業実践力の向上を図るために、同教科・他教科の授業参観を促す。また、授業者と参観者による意見交換を行い、互いの授業改善につなげる。
		2② 生徒への授業アンケートで「授業にまじめに、また積極的に取り組んでいますか」の問いに対し「大変当てはまる」「当てはまる」と回答する生徒の割合が全学年80%以上を目指す。	2② 2学期末に生徒へ授業についてのアンケートをとり、結果を教員で共有することにより、生徒が主体的・積極的に取り組める授業改善に取り組む。	「大変当てはまる」「当てはまる」と回答した生徒の割合 〔1学年〕 69.3% (92.9%) 〔2学年〕 76.1% (77.8%) 〔3学年〕 73.0% (87.0%) 生徒全体 73.0% (87.0%)	B		教科会の中で生徒のアンケート結果について検討したり、ICT活用について研修したりするなど、生徒が意欲的に取り組むことができるよう教材研究及び授業実践に努める。
		2③ 生徒への授業アンケートで「教師が工夫してわかりやすく教えてくれているか」の問いに対し「そう思う」「だいたいそう思う」と回答する生徒の割合が60%以上を目指す。	2③ 2学期末に生徒へ授業についてのアンケートをとり、結果をもとに、各自、授業の振り返りを行い、今後の授業改善に努める。	「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した生徒の割合 「そう思う」 42.9%(22.7%) 「だいたいそう思う」 48.2%(68.2%) 計 91.1%(90.9%)	A		「そう思う」と回答する生徒の数が増えるように相互授業参観を行い、生徒のアンケート結果もふまえて教科会で生徒の実態に応じた授業展開について情報共有し、自らの授業改善に努める。

重点課題	重点目標	評価指標	活動計画	評価指標による達成度 ※()内は昨年度	総合評価	学校関係者評価	次年度への課題・改善策
2 基本的 生活 習慣の 確立	2-1 学校や社会のルールを守るとともに正しく判断し、行動できる生徒を育成する。	1① 生徒のセルフチェックで「学校や社会のきまり・ルールを守ることができる」の問いに対し、「できる」「ほぼできる」と回答する生徒の割合が各学年80%以上を目指す。	1① 計画的に校舎内外の巡視や服装・頭髪指導を行い、気になる生徒には声かけや指導を行う。	「できる」「ほぼできる」と回答した生徒の割合 (1年生) 86.4%(90.0%) (2年生) 89.4%(72.4%) (3年生) 89.3%(80.8%)	A B A A A A	穴吹高校はいつ行っても生徒が元気に挨拶してくれるのでとても気持ちが良い。 各項目総合評価が概ね「A」であり、とてもよい状態である。 清掃活動やゴミの分別のモチベーションを保つために「ぴかぴかコンテスト」や「対抗バトル」などの取り組み方の工夫が「A」の評価につながっている。 「途中で諦めず、努力する精神」についても、きちんと対策がされており、2・3年生は昨年度の値を上回っているので評価できる。	計画的な巡視や服装・頭髪指導により、学校や社会のルールを理解させる。また対話を通して生徒自らが「よりよい学校」づくりに積極的に取り組めるようにする。
		1② 生徒のセルフチェックで「うまくできないことを途中で諦めず、努力することができる」の問いに対し、「できる」「ほぼできる」と回答する生徒の割合が各学年65%以上を目指す。	1② 朝のSHR前の10分間を朝の学習の時間とし、認知力向上トレーニング(コグトレ)を段階的に実施する。具体的には1年生では視覚的短期記憶・聴覚的短期記憶を高めるトレーニング、2年生では注意力や集中力、想像する力を高めるトレーニングを行い、3年生では進学・就職試験に向けた実践的な学習を行う。	「できる」「ほぼできる」と回答した生徒の割合 (1年生) 55.8%(64.0%) (2年生) 70.2%(48.3%) (3年生) 57.1%(73.1%)			本年度より導入したコグトレオンラインを活用しつつ、適宜、従来のプリント学習も併用し、さらに認知力向上トレーニングを進める。
		1③ 学校生活アンケートで「相手や場に応じた言葉遣いができる」の問いに対し、「できる」「ほぼできる」と回答する生徒の割合が各学年80%以上を目指す。	1③ 校内人権の日において、動画説明やグループワークを取り入れた、ソーシャルスキルトレーニングを実施する。	「できる」「ほぼできる」と回答した生徒の割合 (1年生) 90.9%(90.0%) (2年生) 93.6%(79.3%) (3年生) 85.7%(78.8%)			相手や場に応じた言葉遣いや振る舞いをソーシャルスキルの学習を通して身に付けられるよう内容をさらに工夫する。職員入室時や授業前後の挨拶、各種届出書類提出時には、個別に身だしなみや言葉遣いを指導する。
	2-2 学校生活を通して、自主的、実践的な態度を育てる。	2① 学校生活アンケートで「穴吹高校の生徒は、挨拶(会釈を含む)をしている」と回答する生徒の割合が80%以上を目指す。	2① 気持ちよく一日のスタートがきれよう、生徒会役員がリーダーとなり、積極的に挨拶を行う挨拶運動を毎週月曜と金曜の朝に実施する。学校生活のいろいろな場面で、全校生徒が挨拶や会釈を交わすことのできる習慣形成を図る。	「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した生徒の割合 89.1%(91.7%)			生徒会役員や運動部の生徒は、朝も日中も挨拶する習慣が身につけてきている。この雰囲気は他の生徒にも良い影響を与えるよう、挨拶運動に積極的に参加するように働きかける。
		2② 学校生活アンケートで「自分は清掃活動に丁寧に取り組んでいる」と回答する生徒の割合が80%以上を目指す。	2② 学期ごとに清掃活動を頑張っているクラスまたは清掃分担場所を表彰する「ぴかぴかコンテスト」を実施することで、学習環境を整える意識の高揚を図る。	「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した生徒の割合 94.1%(93.9%)			生徒の頑張りを認め、環境改善や意識の向上につながる機会となるよう、学期ごとに2カ所の清掃分担場所の表彰を継続する。
		2③ 学校生活アンケートで「あなたはゴミの分別に気を付けていますか」の問いに対し、肯定的に回答する生徒の割合が80%以上を目指す。	2③ 毎月アースデーを設け、美化委員がゴミの分別を呼びかけ、分別したペットボトルキャップの回収を行う。ペットボトルキャップは家庭からの持ち込みも可としており、「クラス対抗エコキャップバトル」としてペットボトルキャップ回収量の最も多いクラスを表彰することにより、校内のみならず、家庭でもゴミ分別の意識高揚を図る。	「よく気を付けている」「だいたい気を付けている」と回答した生徒の割合 85.6%(70.0%)			ゴミの分別が更に進むよう、美化委員会から呼びかけを行い、エコキャップ回収を継続する。また、水筒を持参する生徒も増えつつあるので、エコ活動の一つとして推奨する。

重点課題	重点目標	評価指標	活動計画	評価指標による達成度 ※()内は昨年度	総合評価	学校関係者評価	次年度への課題・改善策
他者と協調・協働できる力の育成	3-1 自他の生命や人権を尊重する態度を養う。	1① 生徒のセルフチェックで「相手の気持ちを気づかった関わり方ができる」という問いに対し、「できる」「ほぼできる」と回答する生徒の割合が80%以上を目指す。	1① ホームルーム活動での人権問題学習や人権に関するさまざまな校内行事において、生徒の関心や実情に合わせた内容を取り扱う。	「できる」「ほぼできる」と回答した生徒の割合 〔1年生〕 77.3%(92.0%) 〔2年生〕 80.9%(65.5%) 〔3年生〕 89.3%(78.8%)	B	他者との協調・協働できる力の育成は今最も求められる力であり、部活動や様々な学校行事を通じて育成の継続を期待する。 誰もがSNSを通じて人権侵害の被害者・加害者となる可能性が大いにあるので、過去そして現代での人権問題について理解が深められるような取組を期待する。 主権者教育について、1・2年生にはまだ先の話で興味がないようだが、学年が上がるに従って「必ず投票に行く」と答える生徒の割合が増えている。政治参加の重要性について改めて理解を深めるとともに、選挙公報やマニフェストを用いて生徒自身が考察を深めディスカッションできる場を設ける必要がある。今年度すでに地方選投票に行った3年生もいるので、	生徒の実態に合わせた人権問題学習に体験型学習を取り入れて実施し、実際の場を想定したソーシャルスキルトレーニングを行う機会を増やす。 学校が生徒にとって安心・安全な場となるためにも、教職員とスクールカウンセラーの連携を密にし、より相談しやすい環境を作る。また対話を通して生徒理解を深める。 コロナ禍の行動制限解除により、地域との交流を今年度以上に実施したい。
		1② 人権問題意識調査で「困ったときに相談したり助けを求めたりできる先生や友人がいる」と回答する生徒の割合が80%以上を目指す。	1② アンケート調査や校内巡視を行い、いじめの早期発見につなげるとともに、いじめ防止に関するホームルーム活動や講演会を実施したり、教職員及びスクールカウンセラーによる相談体制を強化したりすることにより、学校が安心・安全の場となるように努める。	「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した生徒の割合 88.1%(90.5%)	A		
		1③ 避難訓練を年間2回、防災クラブの活動を年間7回行う。	1③ 生徒の防災意識を高め、発災時に適切な行動を取ることができるよう、避難訓練や防災クラブ活動を推進する。	避難訓練 2回(2回) 防災クラブの活動 7回(7回)実施	A		
	3-2 生徒の人権意識の高揚や人権感覚の育成を図り、人権問題の解決に向けて取り組む力を育む。	2① 12月に実施する人権問題意識調査において、校内での人権学習にクラスが「活発に取り組めた」「どちらかと言えば活発に取り組めた」と回答する生徒の割合が85%以上を、人権問題解消に向けての意欲を持つと回答する割合が70%以上を目指す。	2① 人権ホームルームを年間5回行い、人権問題意識調査を年間2回実施し、生徒の意識の変化を分析する。	「活発に取り組めた」「どちらかと言えば活発に取り組めた」と回答した生徒の割合 82.5%(90.3%) 人権問題解消に向けての意欲を持つと回答した生徒の割合 67.9%(67.1%)	B	1・2年生にはまだ先の話で興味がないようだが、学年が上がるに従って「必ず投票に行く」と答える生徒の割合が増えている。政治参加の重要性について改めて理解を深めるとともに、選挙公報やマニフェストを用いて生徒自身が考察を深めディスカッションできる場を設ける必要がある。今年度すでに地方選投票に行った3年生もいるので、	生徒が活動主体となるような活動を担任が実践しているが、さらに人権問題解消に向けての意欲を高めるために、さまざまな課題を自分事として捉えることができるような課題を設定する。
		2② 12月に実施する人権問題意識調査において、校内での人権学習に「まじめに取り組んだ」「どちらかと言えばまじめに取り組んだ」と回答する生徒の割合が85%以上を目指す。	2② ホームルーム活動での人権問題学習や人権に関するさまざまな校内行事において、生徒の関心や現代社会の実情に合わせた内容を実施することで、生徒の学習意欲を喚起する。生徒の取組に対する教員アンケートを行う。	「まじめに取り組んだ」「どちらかと言えばまじめに取り組んだ」と回答した生徒の割合 92.6%(94.6%)	A	地方議会では国政選挙以上に生活に密着した政策決定がなされるということを意識づける取組の実践を期待する。	ホームルーム活動や人権の日など人権学習に対して真面目に取り組むことができた。来年度は生徒自身がより主体的に考えて学習できるような人権課題や学習内容を精選する。
	3-3 礼儀正しい態度を育成し、コミュニケーション能力を高める。	3① 部活動生集会を各学期に1回ずつ開催する。部活動顧問と担任や教科担当教員が部活動生について話をする機会を作る。	3① 部での活動全てが学校の活性化につながることを自覚させるために、部活動生集会を開催する。また部活動が生徒にとってよりよい成長の場となるよう部活動顧問、担任、教科担当教員が連携しつつ指導にあたる。	部活動生集会を学期に1回ずつ開催した。部活動顧問と担任や教科担当教員が部活動生について話をする機会があった。	A	地方議会では国政選挙以上に生活に密着した政策決定がなされるということを意識づける取組の実践を期待する。	運動部・文化部を問わず、部活動生が学校生活全般の中心的な役割を果たせるようになってきている。今後も、生徒が主体的に学校生活を活性化できるように、職員間で連携して指導を継続していく。
		3② 華の丘祭のアンケート（生徒・教員・来場者対象）において、「生徒が華の丘祭の運営に協働して取り組むことができた」と肯定的に回答する人の割合が80%以上を目指す。	3② クラス・委員会活動・部活動で協力して準備・運営を行えるよう担当教員が連携して指導にあたる。	華の丘祭のアンケートにおいて、「生徒が華の丘祭の運営に協働して取り組むことができた」と肯定的に回答する人の割合は〔生徒〕88.7%、〔教員〕100%、〔来場者〕94.4%	A		クラスや部活動などで複数の役割を担う生徒もいる中、生徒同士で協働して計画的に文化祭の運営に取り組むことができた。今後も、生徒が主体的に取り組めるよう支援する。
	3-4 成人年齢の引き下げに伴い主権者としての自覚と実践力を養う。	4① 学校生活アンケートで「選挙権を得て以降の選挙に必ず投票へ行く」と回答する生徒が70%以上を目指す。	4① 学校全体の教育活動を通じて、生徒一人ひとりが政治や選挙への関心を高めることができるよう指導にあたる。	「必ず投票へ行く」と回答した生徒の割合 〔1学年〕23.1%(28.6%) 〔2学年〕31.9%(17.9%) 〔3学年〕56.0%(54.2%) 生徒全体 37.0%(36.4%)	B	今回調査した結果「わからない」と回答した生徒は全体で54.6%だった。生徒が将来「必ず行く」と回答する人になるようあらゆる機会を捉えて政治や選挙への関心を高められるよう努める。	

重点課題	重点目標	評価指標	活動計画	評価指標による達成度 ※()内は昨年度	総合評価	学校関係者評価	次年度への課題・改善策
4 地域に開かれた信頼される学校づくり	4-1 ふるさとに誇りを持ち、協働して働く力の育成を図る。	1① 地域に貢献する取組を年間7回以上行う。	1① 積極的に地域と連携する活動に参加し、ふるさとへの愛着と、協働する喜びを得る。	エシカルクラブ、家庭クラブ、JRC、防災クラブなどが、地域と連携して10回以上活動した。活動を進める度に自ら参加したいという生徒が増えた。	A	エシカルクラブ、家庭クラブ、JRC、防災クラブの活動が非常に盛んで、地域に開かれた信頼される学校づくりに貢献している。穴吹高校の活動をマスコミ	日頃から地域とのつながりを深め茶染めやポッチャ、防災活動等について地域の方々と互いに学び合う関係を継続する。
		1② 地域貢献活動の成果を発表する機会をもつ。	1② 発表をすることを念頭におき、一年間の成果があらわれるような活動となるように心がける。	発表の機会が、活動のまとめとなることを意識しつつ、様々なことにチャレンジした。	A	等で紹介されると嬉しい。この積極的な取組の継続を期待する。 中学校訪問が教職員の負担	新しい活動を取り入れ、発表できる内容が少しずつ増えている。活動を見直しつつ、今後も継続していく。
	4-2 地域に信頼される学校を目指し、地域の方々と関わる機会をつくる。また、広報活動を積極的に行う。	2① 中学生体験入学の来校者数100名以上、オープンスクール参加者数40名以上を目指す。	2① 「かわら版」を年間2回発行し、学校案内とともに、地域住民や近隣中学校に配付する。ホームページで中学生体験入学や11月の「華の丘教育週間」について情報発信を行う。	中学生体験入学来校者数 92名(76名) 内訳) 中学生61名(50名) 引率教員11名(15名) 保護者20名(11名) オープンスクール来校者数 18名(50名) 内訳) 中学生13名(37名) 引率教員2名(5名) 保護者3名(8名)	B	担になっていないか懸念される。総合評価が「A」であるものの昨年度よりも数値が極端に下がっている項目は、原因を分析し次年度の取組につなげていくことを期待する。 時間外勤務や年休等の取得	各部活動等に各学期に1度はホームページを更新するよう呼びかけ、穴吹高校ホームページの活性化を図る。また、高校説明会の資料をさらに改善し、本校の魅力を中学生に感じてもらい、来校につながるよう情報発信の充実を図る。
		2② 中学校訪問の回数をのべ30回以上を目指す。	2② 中学生の興味を惹けるよう、学校説明動画の充実を図り、魅力ある学校づくりが伝えられる学校説明を地域の中学校で行う。	中学校訪問回数38回(86回) 内訳) 中学校進路説明会関連9回(8回) 部活動関連29回(78回)	A	得日数の問題には共通点がある。教職員が足りていないのであれば増員を求めべきである。教職員にとって心身ともに健康で私生活とのバランスもとれた職場	引き続き積極的に広報活動を行い、地域の中学生に本校の魅力を感じてもらえるよう努める。
		2③ 保護者アンケートにおいて「学校からの通知や広報物に目を通している」と答える保護者の割合を60%以上を目指す。	2③ 広報や通知等を郵送するだけでなく、学校ホームページへの掲載やさくらメールの活用により情報発信を多く行い、保護者が目を通しやすいように図る。	「いつも目を通している」「まあまあ目を通している」と回答した保護者の割合 82.0%(88.3%)	A	環境の実現が必要である。	通知や広報物を学校ホームページや連絡メールを活用したことで、目を通している保護者の割合が8割を超えているので、今後も継続する。
		2④ ピアノコンサートを年1回以上開催し、近隣中学校生徒や同窓会員にも公開する。	2④ ピアノコンサートを開催することで同窓会より寄贈された本校のスタインウェイピアノを周知すると共に、同窓会活動の活性化の一助とする。	在校生と穴吹中学校生を対象としてピアノコンサートを11月に開催し、生徒にピアノの由来を周知する機会を持った。学校ホームページにコンサートについての記事を掲載し、新聞報道もされた。	A		4年ぶりにピアノコンサートを公開することができ、在校生に加え穴吹中学校生を招待し開催できた。今後もピアノコンサートと共に広報活動を継続していく。
	4-3 働きやすい活力ある職場としての学校づくりを行う。	3① 時間外勤務が月45時間を超える教員をなくすよう努める。	3① 出退勤管理システムを活用し、職員自らが勤務時間を把握する。また、管理職及び職員間でのサポート体制を構築し、勤務の均等化を図りながら、対象男性教員の育児・看護・介護休業などの取得促進に努める。	時間外勤務が月45時間を超える教員 延べ33人(12月末現在 昨年度37人)	B		次年度も出退勤システムを活用し、時間外勤務の多い教員に対して適切な指導助言や業務の割振等を継続して行う。
		3② 年休等の取得日数、年間10日以上を目指す。	3② 長期休業中などは行事の精選をし、考査期間中などは研修をできるだけ入れないようにし、定時退勤や年休取得を呼びかける。また、長期休暇中に学校閉庁日を設け、夏休等の取得促進を図る。	年休取得日数年間10日以上 14人/20人(12月末現在)	B		次年度も学校閉庁日の設定や、行事、研修の精選を行い、年休取得の奨励、定時退庁の呼びかけを行う。